

春雨庵の由緒

京都大徳寺一五三世の沢庵禅師は、紫衣事件（朝廷が高徳の僧・尼に対して紫色の衣の授与する特権を幕府が禁じたことに抗議した）により、寛永六年（一六二九）八月、この上山に流されて来ました。

当時の藩主土岐頼行は、この地に小庵を建て居住させたが、沢庵はこの小庵を気に入り、自ら「春雨庵」と命名し、花鳥風月を愛でながら配流の身を慰められたと言われています。

藩主頼行も、名僧沢庵に帰依して教導を仰ぎ、上山藩政史上顕著な治績を挙げ、領民からも名君として慕われました。

寛永九年（一六三二）七月、三代将軍家光により許され、沢庵は三年間の流刑生活を終え江戸に帰りましたが、この間、禅道のほか、詩歌・風流の道、水利や築堤の設計など、京都や江戸の文化を伝え、領民のためにも広範な知識を授け、城下町の発展に貢献されました。

寛永十六年（一六三九）四月、沢庵に帰依した将軍家光は、江戸品川に東海寺を創建し、沢庵を住職に迎え開山としました。

沢庵は、江戸にあっても上山の春雨庵で過ごした頃が忘れられず、時折、語り種になるので、正保元年（一六四四）に頼行は上山の春雨庵を模して、東海寺の境内に塔頭を建立し、その名も春雨庵と名付け、土岐家の菩提寺としました。

その後、幾星霜を経て品川春雨庵が一部改造の際、一間の長押と天井板などを譲り受け、昭和三十年七月、この地に復元したのが現在の春雨庵であります。

正面には、沢庵の尊像（原図は吉川英治、作は初代野川陽山）と、茶人でもあった沢庵を偲び、南側に日本茶道院石山太柏設計による茶亭（望岳軒・聴雨亭）および飯田十基設計の茶庭が配されています。

また、この「春雨庵跡」は、昭和三十年八月三十一日、山形県史跡に指定されております。



春雨庵扁額（春雨庵所蔵）

沢庵禅師が春雨庵にて詠んだ歌 二首

花にぬる胡蝶の夢をさまさじと

ふるも音せぬ軒の春雨

浅くともよしや又汲む人もあらば

われにこと足る山の井の水